ペルー・クスコの子供たち

——児童画交流と「国際化」——

青　木　芳　夫*

Los Niños de Cusco-Perú：
El Intercambio de Pinturas y "Internacionalización"

Yoshio Aoki

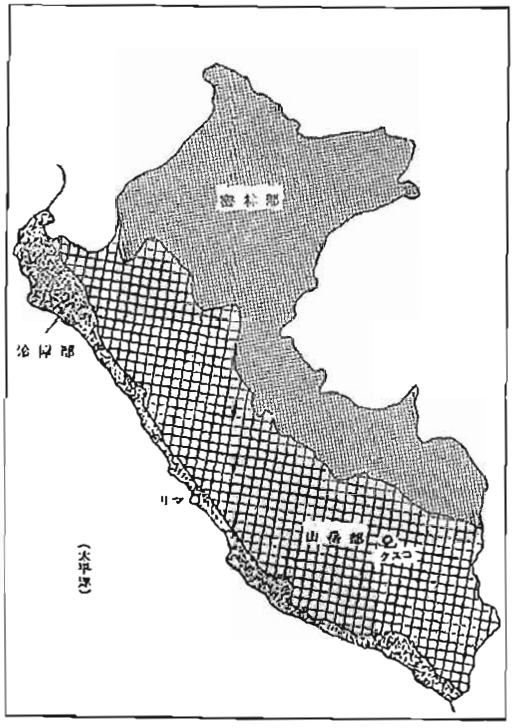
1989年11月20日、第44回国連総会は、無投票、全会一致で「子供の権利に関する条約」（略称、子供の権利条約）を採択した。1959年の国連「子供の権利宣言」が、ここに権利条約へと発展を遂げたのである。そして、1990年8月末までに、31ヵ国が批准したことにより、権利条約は9月2日に発効した。さらに105ヵ国が、「署名」によって将来批准する意思のあることを示している。日本は、ニューヨークの国連本部における「子供のための世界サミット」の開幕を直前に控えた9月22日、ようやく署名した。

本稿では、これを機会に、筆者が専門としているラテンアメリカ地域、とくにペルーの子供について若干検討することにしたい。なお、筆者は、妻アンヘリカ・パロミーノとともに、1986年以来、「児童画の国際交流をすすめる画塾協会」（The Private Art School Society to Encourage International Exchange of Children's Art 略称、The PASS）の交流事業を支援する機会を得た。そして、この交流相手のひとつとして、筆者自身が1985年に受講したケチュア語の集中講座を主催しているカトリック教会系の「解放の神学」の実践機関であるアンデス司牧研究所[1]（Instituto de Pastoral Andina）を通じて紹介されたのが、やはりカトリック教会系の「子供を支援する会」（Asociación Ayuda a la Niñez）であり、同機関が支援するストリート・チルドレンのグループ「フチュイ・ルナ」（Huch'uy Runa）であった。この交流における筆者の体験等を通じて、ペルー・クスコの子供について、また日本のわれわれとの関わりについて、最近流行の用語を使うならば「国際化」はどうあるべきかについて、考えることにする。

ところで、クスコは、ペルーの沿岸部（コスタ）に位置する首都リマからは空路で1時間の距離にある（地図参照）。クスコ市は、ほぼ富士山頂の高さに等しい高地にあり、かつてはインカ帝国の首都であった。そして、いまなお先スペイン期の遺跡にめぐまれ、国際観光都市として、ペルーの山岳部（シエラ）南部では中心的な役割を果たしている。クスコ市のあるクスコ郡の総人口は1985年現在で約25万7000人、そのうちの約4割、つまり約10万2000人が14歳以下の子供であった。クスコ県全体の人口は約94万3000人、子供は39万9000人にのぼる[2]。クスコ県のなかでは同郡が最も「都市」化されている。もっとも、ペルーのリマをはじめ、他のラテンアメリカ諸国の都市と同様に、周辺農村からの人口流入による「スラム」化という大きな課題を抱えたままの都市化である。

平成2年9月29日受理 *史学研究室

地図　ペルー地勢図



I　児童画交流

1990年４月３・４日の両日、今年もまた京都市美術館において児童画交流展が開催された（資料①、②）。今年で第13回を数え、海外からはインド・デンマーク・ペルー・メキシコ・中国の児童の絵が届いた。

資料①　第13回児童画交流展（京都市美術館）

＊児童画に加えて民芸品等を展示することにより、ペルーの人々の暮らしについての理解を助けようとしている。

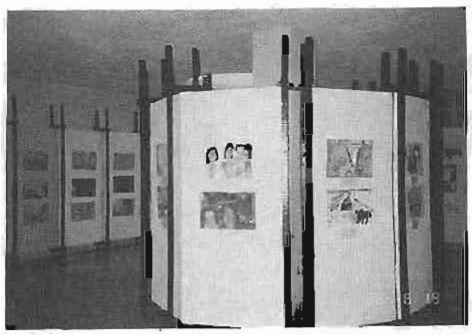
資料②　第13回児童画交流展（京都市美術館）

＊展覧会直前にメキシコ・中国から絵が届いた。来年度に正式に展示される。

この交流展の主催者は、京阪神の美術教師でつくる「児童画の国際交流をすすめる画塾協会」という団体であり、京都市が後援をしている。

そして筆者と妻もまた、これまでに２度、1986年夏のペルー・ボリビア研修旅行と1989年春の妻の里帰りの折に、ペルーとの交流で協力する機会を得た。その結果、1987年の第10回交流展にはペルーからは、リマの日系人団体であり、毎年日系ペルー人や在留日本人の子弟の写生大会を開催している太平洋クラブ[3]（資料③）、クスコ近郊のユカイ小学校、前述のクスコ市内のフチュイ・ルナ、プーノ県サンティアゴ・デ・ブブーハの子供たち、そしてティティカカ湖中のタキーレ島の子供たち[4]（眞島圀弘氏の協力）が出品し、そして1990年には太平洋クラブとユカイ小学校が再度参加した。

資料③　太平洋クラブ主催のコンクール（1986年８月　リマ市の日秘文化会館）



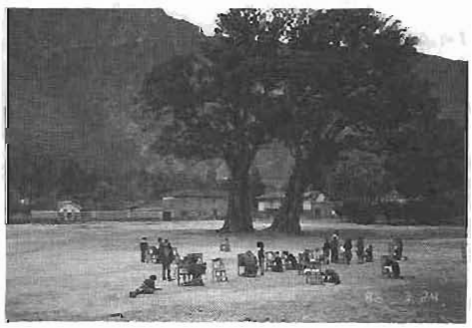
＊学年ごとに決められたテーマについて絵を描く。

筆者夫婦が子供たちと直接交流できたのはユカイ小学校とフチュイ・ルナの場合だけであった。交流の方法は、日本から預かってきた子供たちの絵を見せながら、子供たちの生活ぶりを説明し、その返事としてペルーの子供たちの生活ぶりを絵に描いてもらい、それを日本に持ち帰る、というものである。妻の母校でもあったユカイ小学校では、最初の訪問の翌日に学校前の広場に椅子と机を持ち出して、また家から思い思いの紙と筆記道具をもってきて、写生大会が開かれた（資料④、⑤）。

資料④　クスコ県ユカイ小学校での交流風景（1986年７月）

＊後姿の女性がアンヘリカ・パロミーノ。教室の壁にはインカ期の結縄文字キープの絵などが展示してあった。

資料⑤　写生するユカイ小学校の生徒たち（1986年７月）



＊左手に見えるのが小学校の校舎。

そしてフチュイ・ルナの子供たちは、記念写真を撮るときには、中庭に出て、いつもそうし

て皆で遊んでいるように、早速タワーを作ってくれた（資料⑥、⑦）。交流展のあと、彼らの一人ひとりに、参加証が送られた。ささやかではあるが、日本という遠い国の子供たちが描いた絵を見、自分たちの生活を絵にし、そしてやがて日本から交流展への参加証が自分宛に届くということは、何よりの贈り物であり、励みとなることなのである。

資料⑥　遠帝のタワー（1986年8月）

資料⑦　フチュイ・ルナ（1986年8月）

＊まあたらしいロンペカベーサ（ジグソー・パズル）や糸のこをもって中庭で記念撮影。

この画塾協会による交流展の第1の特徴は、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ・太平洋地域といった第3世界との交流が盛んな点である。たとえば、第10回交流展までに、米国・カナダ・ソ連・フランス・ノルウェーなどと並んで、ベトナム・タイ・インド・インドネシア・イラク・トルコ・パレスチナ・南アフリカ・メキシコ・キューバ・エルサルバドル・ペルー・タヒチ・ツアモツ諸島などと交流がもたれてきた。日本のわれわれは、「国際化」というと欧米諸国との友好のみを考えてしまいがちなだけに、まずこの点が評価できる。

第2に、この交流展ではかならず、絵の展示以外に、何かショーがある。ペルーとの交流が始まった第10回展のときには、クスコ出身のフォルクローレ・グループの「プカ・ソンコ」（ケチュア語で、「熱い心」を意味する）が演奏した。そして今年の第13回展では、パントマイムがあった。それ以外にも、展覧会と同時に工作教室が開催されたり、交流国の人々の生活ぶりを表現するようなポスターや衣装が展示されたり、模型の「ロケット」のなかでビデオが上映されたりする。みんなで楽しみながら興味をもって交流することこそ、とくに第3世界の人々との交流の現場では大事なことであろう。

第3に、そして最も大きな特徴なのだが、この交流展は、まさに「交流」を目的とする展覧会であって、優劣を競うようなコンクールではけっしてない。したがって、交流展のプログラムの表紙にはいつも、「世界のおともだちと絵の交換をしましょう！未来の平和をみんなで育てましょう！」と大書されている。この標語は、じつは会則から来ている。それによれば、「この展覧会は、子供たちの上手にかけた絵をみせるためのものではありません。子供たちがそれぞれの能力に応じて、日常の生活を記録したり、希望や空想を描いたり、美しい景色や物語を絵にしたりしたものを、外国の同じ年頃の子供たちへ手紙として送ります。外国の子供たちからも、同じような絵による手紙の返事が届きます。子供たちは、言葉や気候風土の違う土地に住んでいても、同じような遊びをしていたり、同じ美しさに感動していたりする、たくさ

んの子供たちのいることを認識いたします。そのことは、言葉や民族の違いをこえて理解と友情と信頼の心を育ててゆくことと信じます。そしてそれは未来の世界に大きな平和の礎を築くことになりましょう」（1980年５月施行の会則）。つまり、いわば「等身大」の交流こそ、この展覧会の目的なのである。

それでは、ペルーの子供たちの絵は、彼らの生活をどのように伝えているのだろうか。彼らが描いた「等身大」の姿を文字によって伝えられるかどうか、筆者もやってみることにしよう。

資料⑧の絵は、交流展への出品作ではないが、現在のペルーの一面をよく表わしている。やはりアンデス南部のアヤクーチョ県の５歳の児童が描いた「アヤクーチョにおける死」という題の戦争画である。このような種類の戦争画は日本の子供も好きだろうが、それはあくまで「戦争ごっこ」の絵にすぎないだろう。しかし、この絵は実際の戦争を描いている。アヤクーチョは、ゲリラ軍と政府軍の双方による「政治的暴力」に長らくもっとも翻弄されてきた、そしていまなお翻弄されている地方である[6]。

資料⑧　ギド・ギリェン・デ・ラ・バルカ作「アヤクーチョにおける死」

MUERTE EN AYACUCHO
El campesino vive angustiado entre el terrorismo y la represión, como nos cuenta este niño de 5 años.

＊６月24日のインティ・ライミ（太陽の祭り）を記念する〈全国農民絵画コンクール〉の入選作。1986年のカレンダーにも採用された。「この５歳の子供が語っているとおり、農民はテロリズムと弾圧の板ばさみの中で暮らしている」と、説明されている。

資料⑨の絵は、サンティアゴ・デ・ブブーハという寒村の児童が、アンデス司牧研究所の関連機関にあたるアンデス薬学研究所が主催した、小学生向けの、アンデス伝統医薬講座に参加したときの写生大会で描いたものである。裏半紙のうえに鉛筆か色鉛筆で描いただけの線画にすぎないが、この絵からは、人々がお湯を沸かし、その中にニンジンやサルビアと砂糖（砂糖を調味料として使う習慣はあまりない。甘味はタマネギや果物などで自然に出そうとする。）を加え、薬湯のようにして飲むことがわかる。これは昔

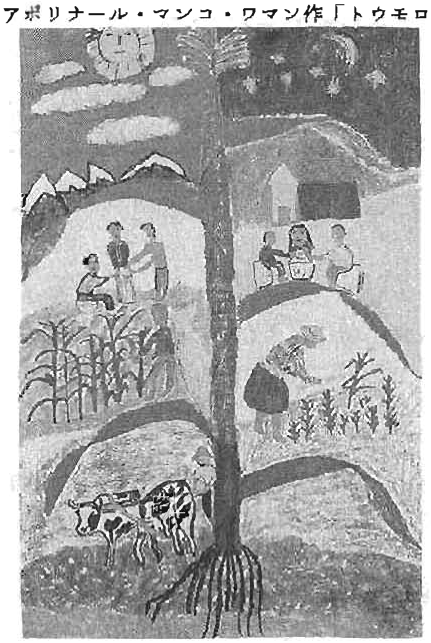
資料⑨　エルネスト・キスペ・キスペ作

通、「マテ」と総称され、アンデス全域で見られる習慣である。いま話題のコカの葉も、「マテ」にして飲むことがある。

資料⑩の絵もまた交流展への出品作ではないが、ユカイ村の人間によって描かれた絵である。ユカイ村が位置するウルバンバ郡は、クスコ市からマチュピチュ遺跡に向かう鉄道が通っており、クスコ市ほど高地にあるわけではなく、昔から気候温暖で風光明媚なところとして知られ、いまでは休暇センターがある。また、トウモロコシの原産地として知られるペルーのなかでも、ウルバンバは、最も大きな粒のトウモロコシが取れるところである。国内消費向けだけでなく、スペインなどにも輸出されている。日本にも輸出されているが、われわれの口に入る頃には、加工され、歯応えばかりが印象に残るような「ジャイアント・コーン」になってしまっている。しかし、たとえばウルバンバの農家を訪問したとき、なにはともあれ出てくるのは、山盛りのゆでたトウモロコシである。取りたてのトウモロコシはチョクロ、保存用の干したトウモロコシはモテという。よく噛みしめたなら、ほのかにきっと日本の栗の味がしてくるだろう。

また、市場向けに作られるのは白トウモロコシと、チチャ・モラーダというジュース用の暗紫トウモロコシくらいであるが、自家消費用に、というよりむしろ生存のための、先祖伝来の生活の知恵として、多種多様なトウモロコシを作っている[4]。そういうトウモロコシを食べてみたいと思ったなら、たとえばウルバンバなどの産地に行くしかない。絵は、トウモロコシによって規定されたユカイ村の家族生活をよく描いている。なんといっても、トウモロコシが生命樹のように、頼もしく見える。

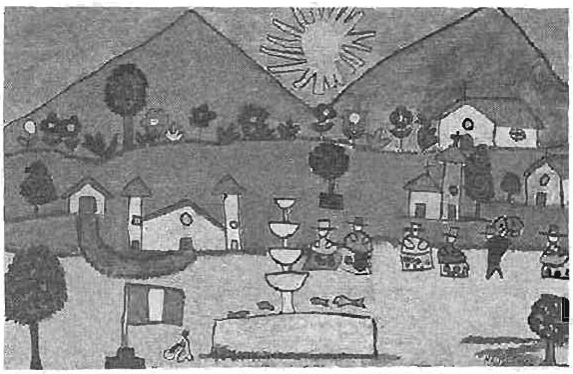
資料⑪　アポリナール・マンコ・ワマン作「トウモロコシ栽培」



＊⑧と同じく、〈全国農民絵画コンクール〉の入選作。

資料⑪の絵は、フチュイ・ルナのメンバーが描いたもので、絵葉書の原画に使用されている。題は「わたしの町」である。彼らが最も好んで描くテーマである。資料では色がわからないのが残念だが、真ん中の青い部分が水を表わしているとすれば、作者はティティカカ湖周辺の出身かもしれない。しかし、たとえば山は緑色と思っているわれわれからすれば、彼らの色づかいはまさに意表をつくものである。そして、手前の噴水では魚が空中を泳いでいる。彼らには、たとえ見えないものでも、知っているものは何でも、一緒に描いてしまう、そういう傾向があるようだ。だから、地下の根っこやジャガイモまで描いて、われわれの目にはなかなか見えなくなったものの存在を教えてくれるのである。

資料⑪　ネメシオ作「わたしの町」



＊自分たちの作品を絵葉書にするまで、彼らも専門写真家の黒白写真から作った絵葉書を観光客らによく売り歩いていた。

この最後の特徴の点で、今年の大会では非常に興味深い出来事があった。それは、交流展のプログラムの各国紹介のなかで平均寿命やノーベル賞受賞者の数が載せられていたことが、大会のあとで、会員の間で議論になり、反省する点となったことである。1990年6月発行の『THE PASS 通信』はつぎのように伝えている。「展覧会のパンフレットでペルー、インド、デンマークを紹介する文面（平均寿命やノーベル賞受賞者の数）で国のあるいは国民の優劣をつけるような印象を読む人に与えた点は配慮に欠けていた」。このように、優劣をつけまい、とする点において、画塾協会の人々の姿勢は徹底している。

これ以後は推測にすぎないが、確かに平均寿命にせよノーベル賞受賞者の数にせよ、それは事実である。しかしながら、事実の意味するところを、たとえばペルーの平均寿命はなぜ短いかを伝達するためには、多くの言葉を必要とするだろう。説明抜きの数字の紹介がどんな結果をもたらすかは、だれにも分からない。ましてや今日の日本のような「豊かな社会」の幼児や小学生に理解させることは難しいことだろう。

実際、筆者自身、アンデス司牧研究所が作製した、ペルー・アンデス南部の民衆が抱えている社会問題に関するスライド[7]、したがってどちらかといえば暗い場面の多いスライドを授業中に上映することがあるが、それを見た大学生の多くが「日本人に生まれてよかった」とか「ペルーは、政府や国がもっとしっかりしなければいけない」という、正直ではあるが、上映者の意図と反するような感想を寄せてくる、という経験をしてきた。

したがって、交流展の性格と目的からすれば、また子供に無用の偏見や優越感を抱かせず、第3世界の子供たちの生活に楽しく興味をもたせることが最優先されるとすれば、それはまさに適切な議論であり反省であった、と筆者は考える。しかしながら、大学の授業においては、たとえば「平均寿命が短くてペルー人はかわいそうだ」という第三者的な同情にとどまるので

はなく、日本のわれわれとはまったく関係ないのだろうか、と問い直してみる姿勢こそ、大切だろう。

次節以下では、ペルー・クスコの子供たちこそ、現在の困難な社会経済的、政治的状況のしわ寄せを最もこうむっていることを指摘したい。

II　ペルー・クスコの子供の全般的状況

1990年7月28日、日系のアルベルト・フジモリがペルー大統領に就任した。泡沫候補の一人だったフジモリの、世界的に著名な文学者のバルガス・リョサ候補を決戦投票で圧倒した末の勝利である。フジモリを大統領候補に擁立した選挙母体は「変革の90年 Cambio '90」という名前である。既成政党に対する不信を言葉に出し、「忘れられてきた人々」つまり貧者の革命を説いたフジモリは、都市のスラムや農村部の民衆票を掘り起こすのに成功した。1984年4月から1年間、筆者はペルー・リマのカトリック大学経済学部で留学生活を送った。といっても、半年くらいは、ペルー国内やチリ、ブラジルを旅行して暮らした。当時、よく購読していたペルーの雑誌に『1/2 Cambio』（直訳すれば、半分だけの変革）がある。ある友人によれば、この名前はペルー人の性格をよく表わしているという。つまり、ペルーでは1968年以降の数年間、左派軍事政権の時代もあったが、ペルー人は本質的に大幅な変革を望まない、保守的な性格の国民なのだという。それが、根本的な変革を望むようになったわけである。なにか、社会の主役の交替を予感させる。

ともあれ、それほどまでにペルーの危機は深刻である。しかし、シエラの中でもとくにアヤクーチョ・ワンカベリカ・クスコ・アプリマック・プーノの5県からなる「アンデス南部 Sur Andino」は1950年以来の40年間、極論すれば16世紀のスペインによる征服以来、常に危機だったといえる。戦後のペルーでは、リマの一極集中的な「発展」が見られた。また、縁辺の地域では、アンデス南部を含む南東部よりも、ピウラ、チクラーヨ、トルヒーヨ、チンボーテの北西部のほうがまだ発展した。急峻な山脈が連なる南東部よりもまだ、北西部のほうが道路交通網を建設しやすかったことがその一因である。そして、サトウキビやワタを中心とするコスタの輸出向け灌漑農業と比較して、トウモロコシやジャガイモを中心とするシエラの国内向け自給農業が中央政府によって無視され続けたことにより、かつてのインカ帝国の中心地であるアンデス南部は、地盤沈下を余儀なくされ続けてきたのである。その結果、1950年以降、先祖の時代から3000－4000メートルの高地で暮らしてきた先住民たちは、コスタへ、あるいはセルバへと、1000メートル以下のところへと下っていった。そして彼らの移住によってこそ、ペルー、とくにリマの都市化が進行していったのである。今日（1989年）では、ペルーの総人口約2180万人のうち、約623万人がリマ首都圏に住んでいる。しかし、その半数近くがスラム暮らしであるといわれる。

ただ、アンデス南部から見れば、この現象は、意欲のある青年層の流出を意味した。それこそまさに危機であった。かつてドイツ系のアナ・マイエルは『サンチャゴの世界』という絵本の中で、アンデス中部の寒村育ちのサンチャゴ少年が、ふとしたことでリマで暮らすようになり、さまざまな周縁的職業を経験しながら、夜学に通い、ついにはそこで知り合った少女と一緒に生まれ故郷に帰っていく姿を描いたことがある。しかし、実際には、そのようなUターン組を受け入れるだけの包容力をなくすくらいにシエラは急速に解体されていきつつある[8]。逆に、リマの危機のいまこそ、アンデス南部はその慢性的な危機を好機に変えなければいけないだろう。

次に、このようなペルーの危機、とくにアンデス南部の慢性的な危機が、子供たちに対していかなる影響を及ぼしているのか、表①・②を見ることにしよう。

表① ラテンアメリカ諸国および日本の子供の状況

	日本	キューバ	チリ	メキシコ	ブラジル	ペルー	ボリビア
人口指標							
合計特殊出生率(1988)	1.7	1.7	2.7	3.5	3.4	4.4	6.0
粗出生率(1988)	11	16	24	29	28	34	43
粗死亡率(1988)	7	7	6	6	8	9	14
乳児死亡率(1988)	5	15	19	46	62	87	109
5歳未満児死亡率(1988)	8	18	26	68	85	123	172
同順位	128	105	97	73	66	46	29
妊産婦死亡率(1980-87)	16	34	47	82	120	88	480
人口の年間成長率(%)(1980-87)	0.6	0.5	1.7	2.3	2.2	2.6	2.7
経済指標							
1人当たりのGNP(米ドル、1987)	15760	—	1310	1830	2020	1470	580
同平均年間増加率(%)(1965-80)	5.1	—	1.0	3.6	6.3	0.8	1.7
(1980-87)	3.2	—	-1.1	-1.6	-1.0	-1.0	-4.9
インフレ率(1980-87)	1	—	21	69	166	102	602
絶対的貧困水準以下の人口の比率(%)(1977-87) 都市	—	—	—	—	—	49	—
絶対的貧困水準以下の人口の比率(%)(1977-87) 農村	—	—	—	—	—	—	85
政府支出比率(%)(1986/87) 保健	—	—	6	—	6	4	1
政府支出比率(%)(1986/87) 教育	—	—	13	—	3	—	12
政府支出比率(%)(1986/87) 防衛	—	—	11	—	3	—	6
世帯当たりの所得の分布(%)(1975-86) 最下位40%	22	—	—	10	7	7	12
世帯当たりの所得の分布(%)(1975-86) 最上位20%	38	—	—	58	67	61	58
債務支払いが商品やサービスの輸出額に占める比率(%)(1987)	—	—	21	30	27	13	22

表①(つづき)

		日本	キューバ	チリ	メキシコ	ブラジル	ペルー	ボリビア
教育指標								
成人の識字率(1985)	男	—	96	97	92	79	91	84
	女	—	96	96	88	76	78	65
小学校就学率(全体、1986-88)	男	102	107	103	119	—	125	97
	女	102	100	101	116	—	120	85
初等教育終了児(%)(1985-87)		99	92	33	71	22	51	—
中学校進学率(全体、1986-88)	男	95	85	72	54	32	68	40
	女	97	92	76	53	41	61	35
栄養指標								
低出生体重児の出生率(%)(1982-88)		5	8	7	15	8	9	12
栄養不良児の比率(%)(1980-87) 5歳未満の中・重度の低体重		—	—	3	—	13	13	15
1人当たりの食糧生産の平均指数 (1979-81=100)(1988)		98	105	108	93	111	103	95
1人当たりの毎日の必要カロリーの充足率(%)(1984-86)		122	135	106	135	111	93	89
保健指標								
安全な飲料水を入手できる人々の比率(%)(1985-87)	全国	—	—	94	77	78	55	44
	都市	—	—	98	89	85	73	75
	農村	—	—	71	47	56	17	13
完全な予防接種を受けた1歳児の比率(1987-88)	結核	85	98	98	72	67	73	27
	3種混合	83	94	96	60	54	66	39
	ポリオ	95	94	96	95	89	67	40
	はしか	73	85	95	70	60	57	44
妊婦に対する破傷風の接種(1987-88)		—	—	—	—	—	8	25
保健員の付添を得た出産の比率(%)(1983-88)		100	—	98	94	95	44	36
出生時の平均余命(年)(1988)		78	74	72	69	65	62	53

(出典) ユニセフ『世界子供白書　1990年』

表①に見るとおり、ペルーの子供の全般的状況は、日本をはじめとして、また他のラテンアメリカ諸国と比較しても、ハイチ・ボリビアを除けば非常によくない。

ユニセフは、子供の状況を比較する単一の指標としては、国民総生産（GNP）ではなく「5歳未満児死亡率」（出生1000人当たりの5歳未満児の年間死亡数）を最も重視し、その高い順から統計資料を作製しているが、それによればペルーは1988年の数字で123人、131ヵ国中で第46位に位置し、同死亡率が「高い」グループに属している。ユニセフは、2000年までにこの死亡率を70人以下に減少させること（あるいは1980年当時の数値を半分に減らして、どちらか少ないほうにすること）を目標に掲げているが、そのためにはペルーはこれから年間平均で4.7%ずつ死亡率を低下させる必要がある。しかしながら、これは非常に困難な数字である。というのは、1960－80年間の平均低下率が2.4%だったのが、1980－88年には2.0%へとすでに悪化しているからである。また、1人当たりのGNP年間平均増加率もまた、1965－80年の0.8%から1980－87年にはマイナス1.0%へと減少している。

そのほか、最近では、平均余命、識字率、栄養の十分な子供の比率、きれいな水を入手できる人々の比率などが重視されるようになっている。というのは、これらの指標は、開発の過程へのインプットではなく、開発の過程の「最終的な結果」をあらわしているからである。これらの指標をとってみても、ペルーの実績は芳しくない。

さらにまた、ラテンアメリカは国内的不平等が比較的大きい地域であり、ペルーもまたその例外ではない。たとえば、ブラジル、ペルーの1人当たりのGNPはそれぞれタイ、スリランカのそれの約2倍であるにもかかわらず、最貧層である40%の人々の暮らしの水準はそれぞれほとんど変わらない。この点を地域間格差の面から、ペルーについて見たものが、表②である。

表② ペルーの子供の状況（全国ならびに県別）

	全国	リマ	クスコ	アプリマック	マドレ・デ・ディオス
人口指標(1987)					
合計特殊出生率	4.5	3.2	5.9	6.1	6.2
粗出生率	34.9	28.3	40.2	37.5	42.8
粗死亡率	9.4	5.9	16.2	16.0	11.2
乳児死亡率	88.2	61.4	132.5	125.5	94.7
妊産婦死亡率(1985)	—	—	313	303	—
都市人口(%)(1985)	67.1	96.1	43.8	26.2	50.1
人口の年間成長率	2.6	3.3	2.0	0.9	3.5
経済指標					
1人当たりのGNP(インティ、1985年)	179.0	249.0	94.7	50.4	254.4
同平均年間増加率(%)(1978-85)	-2.4	-3.3	-0.8	-0.5	-3.2
教育指標					
成人の非識字率	15	3	30	48	9
就学率	65.2	74.9	63.1	66.0	62.0
5歳以上の学業終了年数	5.9	7.3	4.2	3.1	5.5
栄養指標					
6歳未満の栄養不良児の比率(%)	37.8	17.0	(	56.1	)
公共サービス(1981)					
飲料水のない住居(%)	—	37.6	77.6	8.5	65.4
下水道のない住居(%)	—	45.9	86.7	94.8	78.2
電気のない住居(%)	—	21.7	73.9	89.6	63.9

保健指標(1984)				
完全な予防接種を受けた	結核	67	88	47
1－5歳児の比率	3種混合	37	58	9
	ポリオ	38	61	7
	はしか	53	71	28
出産の付添人	専門家	55.2	90.6	27.5
	民間医・助産婦	22.7	4.3	9.1
	家族	19.1	3.6	58.6
	なし	1.2	1.0	0.3

(出典) Barreneches L. 1989: Cuadro № 4

ペルーは大きく沿岸部（コスタ）・山岳部（シエラ）・密林部（セルバ）の3地帯に区分されるが、この区分法に従うならば、表②の中のリマはコスタに、クスコとアプリマックはシエラに、そしてマドレ・デ・ディオスはセルバに、それぞれ属している。最近、リマへの一極集中を是正するために「レヒオナリサシオン　regionalización」という地方分権化が推進されており、クスコ、アプリマック、マドレ・デ・ディオスの3県は「インカ」地方という広域行政単位を構成するようになった。

ともあれ、表②を見れば、リマと比較したときの他の3県、とくにクスコ、アプリマックの子供が置かれている状況の不利益さが明白であろう。その状況は、主としてアフリカに位置する最貧国の平均的な数値にむしろ近づきつつある、といってよいほどである。

III　フチュイ・ルナ――ストリート・チルドレン――

このように、今日、「生よりも死に近い」多くの子供たちがいる。9月30日に「世界子供サミット」で採択される予定の宣言では、「毎日4万人の子供が栄養不良やエイズなどの感染症、きれいな水の不足、非衛生、麻薬問題で死んでいる」と指摘されている。その中でも、第3世界の都市問題のひとつとして世界的に注目されはじめているのが、ストリート・チルドレン、つまりホームレスの子供の問題である。ストリート・チルドレンはさまざまな呼び方があるが、「街頭にいる子どもや青少年のことで（専用に使われていない住居や廃地なども含めて最も幅広い意味での）街頭を常駐のすみかにしていて、適切に保護されていないもの」とふつう定義され、ユニセフの推定によれば、世界中で少なくとも3000万人もいる。1億人にのぼる、と推定する専門家もいる。ストリート・チルドレンになるのは、主として男児である。すでに家族との絆がまったくなくなった、本当のストリート・チルドレンもいるが、まだ何らかの絆を残しながら街頭で暮らす子供も多い。

この現象は、ラテンアメリカ、とくにメキシコやコロンビア、ブラジルのように、ある程度発展した諸国の都市に集中して見られ、そこには20万、30万単位でストリート・チルドレンが存在するが、ペルーでも最近注目されるようになってきた[9]。そしてクスコ市だけで1986年現在3000人以上の「放棄された子供」つまりストリート・チルドレンがいるという。彼らを生む要因には、家族的危機ないし不安定、継父母による虐待、経済的問題、社会的要因、孤児等が考えられる。本稿ではこれ以上の検討を差し控えるが[10]、政治的暴力をも含む今日の危機に対して子供こそもっともひ弱な存在であることは確認しておく必要がある。

このようなストリート・チルドレンの問題に対してクスコ市においてもっとも精力的に取り組んでいる機関のひとつがカトリック教会系の「子供を支援する会」であり、同機関が支援し

ているストリート・チルドレンのグループがフチュイ・ルナである。だいたい5歳から15歳までの40人前後の子供が、ほぼ毎日のように通ってくる。長文になるが、バレネチェアが聞き取りをした子供の証言を、紹介しよう。

「私は13歳です。弟妹が4人います。現在、小学校の4年生です。弟の1人も通学しています。／私の家では、父だけが小学校に行きましたが、どの学年まで行ったのか、私は知りません。父は靴屋で働き、母は衣服を洗濯しています。／私は両親とは暮らしていず、日曜日だけ会いに行きます。施設で暮らすほうが好きです。というのは、家には寝る場所もないし、父の稼ぎだけでは私たちは食べていけないからです。／私は数年前からフチュイ・ルナにいます。ペペという青年が私をここに連れてきてくれました。彼は、牛乳が飲みたいかと私に尋ねました。それから私が中に入ると、私の名前を聞き、よかったら毎日来てもよいといいました。その時から、私は行くようになりました。／私は満足しています。というのは、好きなことをやれるからです。毎日、絵を描いたり、皮製のキーホルダーを作ったりします。私たちがした仕事に対しては、支払ってくれます。仕事はいつもチームでします。というのは、みんなが参加して、稼げるようにです。自分で稼いだ分は、自分で使ったり、母のところにもっていったりします。家にいくときはいつも少しはもっていきます。／私には、フチュイ・ルナはとても役立っています。両親も私がここにいることに満足していますし、いまでは妹もここにいます。というのは、家では食事代にも事欠く有様で、朝食しかとらないときがあるからです。私が行っても、朝食しかもらえません。昼食や夕飯はふつうヌードル・スープだけで、お金があるときには父がニワトリの内臓を買ってきます。／警察には2度捕まりました。夜、アルマス広場で遊んでいたときに一斉手入れにあってしまったのです。警察署で一夜を過ごし、名前を書き留められてしまいました。彼らが私を捜しにきてくれたので、私は釈放されました。房には年上の少年もいましたが、なにもされませんでした。／アルマス広場やレコシーホ広場で眠ったこともあります。グレたわけではなくて、互助会で踊りがあったときに居残っただけです。踊りにいくのは好きですが、自分が踊るのではなく、演奏をみるのが好きなのです。ビンを片付けるために私を入れてくれるのですが、私はビールを飲んだこともありません。その気にならないのです／私はこの施設はよいと思います。なぜなら、昔は何も知らなかったのですが、いまでは絵を描くこともできます。妹も私も満足しています。／大きくなったら何をしようか、まだわかりません」（ウィルバート）。

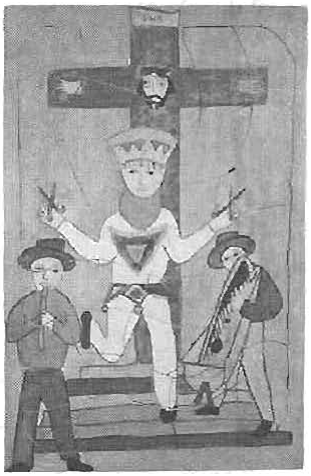
「私は15歳です。5人兄弟の2番目です。兄はリマにいます。2人の弟は、まだ私が小さいときになくなりました。なんで死んだのかは、知りません。私はいま、小学6年生です。／父はもう死んで、いません。しかし、継父がいます。私は8歳のときからフチュイ・ルナにいます。当時母だけが市場で物を売って働いていました。継父は働いていませんでした。だから、私の家ではお金が足らず、皆を養えなかったのです。（中略）ここでは、たくさんのことを学びました。たとえば、絵を描いたり、のこぎりで切ったり、マスコットを作ったり、つまり何でも習ったのです。またグループで作業することも習いました。［ジグソー・パズルの］盤に色を塗るときは、年少のグループも加わってきます。そして各自は、作業の難易度に応じて支払いを受けるのです。われわれは皆で、価格を決め、そして各人の報酬額を決めるのです。（後略）」（ヘススス）。

これらの証言にあるとおり、フチュイ・ルナは、何らかの事情により家庭におれなくなった子供たちの、無料の給食所兼宿泊所であり、そして職業訓練所でもある。従来のような、もっぱら保護を目的とする施設とは、まったく趣を異にしている。子供たちは、皆、遊び仲間、勉強仲間、仕事仲間、そして同じ屋根の下で暮らす仲間なのである。その連帯の強さは、タワーを作ったときの息のよさによく表われている。

しかし、フチュイ・ルナがクスコ市内のどこにあるかは、そこに通ってくる子供の人権を守

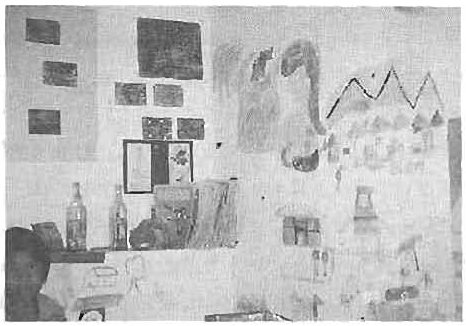
るために秘密にされている。1986年８月、児童画交流のために筆者が訪れたときには、手作りのオモチャを作っていた。そして、絵葉書を作ろうとしていた。国際観光都市クスコという性格を考えるならば、これは賢明な選択であった。そしてたとえば、ベニア板製のジグソー・パズル（資料⑫、⑬）を例にとれば、原画を描くのは、絵の上手な年長者であるかもしれないが、年少者もまた板を切ったり、自分の好きな色を塗ったりしていた。そして、それが売れたなら、仕事の量に応じて報酬を手にすることができるのである。彼らが交流展のために贈ってくれた絵は、主として、重ね塗りした色のうえをペン先できずつけて描いた、楽しい絵であった。つまり、ジグソー・パズル用の原画ではなくて、趣味で描いた絵を贈ってくれたのである。

資料⑫　ジグソー・パズル「はさみの踊り」



＊「はさみの踊り」は、いろんな祭りで踊られるが、この絵は、背景に十字架があるので、ペンテコステの祭りの模様と思われる。

資料⑬　フチュイ・ルナの部屋の内部



＊右側の壁のように、部屋の中には落書きでいっぱいだった。交流展に送られてきたのは、左側の壁に貼ってある小品群である。

このフチュイ・ルナの方法は、ストリート・チルドレンを特別視することなく、地域社会のなかでなんとかその人格形成と社会化とを、美術教育をとおして支援しようとするものであり、その経験は貴重である。ペルーだけでなく、世界中でも非常に先駆的なプロジェクトといえる。実際、フチュイ・ルナというその名称は、彼らの母語であるケチュア語から来ており、「小さな人間」、あるいは「小さな大人」という意味である。発効したばかりの国連「子供の権利条約」では、近代工業社会の確立以来、これまで単に未熟で保護されるべき存在とのみ見なされてきた子供は、積極的に権利の主体として、大人社会に参加することができると定義しなおされることになった[11]。フチュイ・ルナの方針は、このような子供観を先取りしたものといえ、実際、子供の主体性を大切にしている。

しかしながら、偏見にとらわれた法執行機関等からはむしろ不信の目で見られ、施設が警察の「襲撃」を受けたり、指導者が拘留されたり、子供が虐待されたりしている、と伝えられている。また、3000人といわれるクスコのストリート・チルドレンの規模からすれば、フチュイ・ルナの貢献よりもむしろ問題の深刻さのほうが目に付いてしまう。実際、クスコ県では働く子供がおおく、前回のセンサス（1981年）では、14歳以下の児童のうち約７万8000人が、何らかの形で働いていた。そのうち４分の３が農業に従事していた。また、父親不在の世帯がおおく、4914戸の世帯では５－19歳の未成年者が家長の役割を果たしていた。そのうち25％、つまり1200人くらいは、５－14歳の子供であった。こういうふうに考えるならば、ストリート・チルド

レンの膨大な予備軍が、クスコでも存在することになるのである。

Ⅳ　世界システムの中での日本との関わりと「国際化」

最後に、児童画交流展に見られるような「等身大」の交流は、日本の子供たちにとって「国際化」への第1歩であろうし、貴重な経験となるであろう。しかしながら、ペルーの、とくにクスコなどアンデス南部の子供たちの多くが、「生よりも死に近い」と形容できるほど苛酷な生活条件の中で暮らしていることもまた、事実である。本節では、世界システムの中でペルーの子供と日本のわれわれとの関わりを考えてみることにしよう。

実際、世界システムにおける先進諸国と第3世界との関係は、われわれに意識の転換を促すほど劇的に変化してきた。

たとえば、ラテンアメリカ諸国の多くが苦しんでいる累積債務問題ひとつをとってみても、アグリビジネスの専門家スーザン・ジョージは、『債務危機の真実』の中で、「（IMFの調整）政策の社会的犠牲は悲劇である。それは約50万人の子供たちの死を意味している」というペルーの前中央銀行総裁マニュエル・モレイヤの言葉を引用しているし、さらに「この10年間（1970－1980年）、（1人当たり）金利返済が年に10ドル増加するごとに、寿命上昇は年率0.39だけ低くなるという結果をもたらす」という、2人の社会学者のラルフ・セルとスチーブン・クニッツの調査結果を紹介している。

債務危機が子供に及ぼす悪影響については、ユニセフもまた警鐘を鳴らしている。たとえば、『世界子供白書　1989年』によれば、第3世界が償還しなければならない元利額はその輸出収入のほぼ25％にのぼり[12]、また、10年前とは異なり、いまでは年に少なくとも200億ドルの資金が、「南」から「北」の先進工業世界へと逆流するようになっているのである。その結果、米州開発銀行総裁のエソリケ・イグレシアスによれば、ラテンアメリカの人口の3分の1の1億3000万人が極貧のもとにある（1988年9月）。そして『世界子供白書　1990年』はもっと率直に「最も貧しく最も弱い子供が、自分の健康を犠牲にして、第3世界の債務を支払った」と指摘し、現状のままでは、1990年代には1億人以上の5歳未満児が死亡し、その何倍もの数の子供が栄養不良のまま成長することになる、と予想している。日本人の平均寿命が延びたからといって、そのぶん第3世界の子供たちの死亡率が上昇し、彼らの平均寿命が短縮されているとすれば、われわれも、喜んでばかりはいられないだろう。

もちろん、ペルーの危機には国内的要因もおおいに関係している。しかしながら、彼ら民衆の耐乏もいまや、限度に達している。ペルーの新大統領フジモリは、就任早々、前政権までの日常必需品に対する補助金を撤廃し、たとえば、ガソリン価格は一夜にしてそれまでの30倍となった。この政策は、選挙運動中の公約に違反していたこともあって一般民衆を驚かせ、「フジ・ショック」と呼ばれるようになった[13]。とするならば、問題解決のためには、「北」の先進工業世界で暮らすわれわれこそ、これまでの浪費的な大量消費生活を変えるほうが容易であろうし、もしわれわれの生活の質を変えなければ、「南」の民衆や子供は、ただ単に「南」に生まれたからといって、いつまでもこの「不条理な苦痛」から逃れることはできないであろう。

2度の石油危機を乗り越え、情報技術革命が急速に進行している日本で暮しているわれわれにとって、80年代を通じてマイナス成長に苦しんできたペルーのような国で暮らす人々の生活を想像することは非常に困難なことである。たとえば、日本の中高校生のアジア認識について村井吉敬は、「アジアの人たちは貧乏で、汚い、遅れている。かわいそうだ。日本人に生まれてよかった」と一般化し、なぜそうなのか、日本の責任はないのか、と問おうとはしないと指摘している。結局、日本のわれわれのアジア・アフリカ・ラテンアメリカ認識は、傍観者的な

認識や、せいぜいのところ同情の域を出ず、その結果、量的には有数の援助大国となりながら、日本の援助は真に市民的な理念を欠き、いまだに慈善的行為にとどまるか、むしろ日本企業寄りの開発援助の横行を許しているのである。しかし、松井やよりの近著（『市民と援助』）で指摘されているとおり、欧米先進諸国の市民の援助観は、開発教育やNGOの活動を通じて近年、大きく転換してきたし、真の自立に向けて試行錯誤を繰り返している、当の第３世界民衆の、援助を見る目も厳しくなってきている。一言でいうならば、「慈善から正義（公正）へ」（ブレーメン人権開発情報センター）、「援助から支援へ」と、転換してきたのである。

このような世界的現実と日本のわれわれの認識との間のギャップを埋めることが、いま切に求められているだろうし、これこそ真の「国際化」につながるだろう。そして、そのための手段が、いわゆる「開発教育」である。吉田晴彦は、開発教育について次のように説明している。「民衆（とりわけ先進諸国内）の意識を高め、何らかの動員を促すことにより、地球的規模の開発問題解決の糸口を見出そうとする運動」と定義することができる「開発教育」は、それまで「南」の民衆を対象にしてきたのが、「北」内部の変革を促す必要が認識されはじめ、そのためには民衆の意識改革、参加が必要不可欠になったときに盛んになりはじめたのである[14]。

また、はたして日本は、ストリート・チルドレンの問題とまったく無縁なのだろうか。堂本暁子は、登校拒否児などを日本の「隠れストリートチルドレン」として捉えようとしている。これまでの先進諸国の発展には、問題はなかったのだろうか。第３世界の低開発に対して、先進諸国は「過剰開発」に陥ってはいなかっただろうか、と人々は問いはじめている。それは、たとえば篠原一が「経済栄えて、社会滅ぶ」と表現する今日の日本社会にふさわしい、同問題の顕われ方ともいえよう。

したがって、われわれもまた、ストリート・チルドレンの問題に無関心ではいられないし、ある意味では、日本の登校拒否児の問題と取り組むことにより、われわれ自身の生活スタイルを変え、やがてはそれが、地球の反対側のストリート・チルドレンの自立を支援することにつながるかもしれないのである。欧米諸国との単なる友好よりも、地域における公正の達成と開放こそ、真に地球的規模の「国際化」への第１歩となるだろう。

【追記】本稿のテーマについて、筆者は1990年９月29日ラテン・アメリカ政経学会関西部会（京都外国語大学）において報告した。

【注】

1）アンデス司牧研究所は、1985年当時クスコ市内に本部があったが、やがて保守的なクスコ司教との関係が悪化し、現在では、本部はクスコ県内とはいえさらに南のシクアニにある。

2）ペルー人口の年齢別構成を図示すれば、見事なピラミッド型を描く。1985年頃の総人口は約1900万、そのうち1200万が25歳未満であり、そして600万以上が10－25歳の年齢層であった。

3）日系ペルー人の団体としては各県人会が強力であるが、太平洋クラブは、その中では珍しく県人会の枠を越えた横断的な団体であり、比較的若い層がリーダーシップをとっている。

4）タキーレ島は、独特の音楽・舞踏・風習・衣装で最近観光地として注目を浴びているケチュア系社会であるが、子供たちはクレヨンやクレパスで絵を描くのは初めての経験であった。眞島氏といろんな話をしながら、何時間もかけて絵を仕上げたという。

5）ラテン・アメリカ政経学会関西部会（1980年９月29日）において辻豊治氏が紹介した『ペルーにおける政治的暴力』（DESCO）によれば、1980－87年間にアヤクーチョ県では計2756件の暴力が記録され

ている。これはリマの3073件についで多い。とくに最近までは「センデーロ・ルミノッソ」（輝ける道）というゲリラ組織の活動拠点であった。これらの「政治的暴力」の結果、1980年5月から1988年12月の間までに合計1万1311名が犠牲となった。

6）われわれは新大陸原産の作物、トウモロコシやジャガイモに多くを負っている。それは過去だけのことではない。アンデスの民が生活の知恵により何百種類ものトウモロコシやジャガイモの原種・品種を伝えてきてくれたことにより、今日、バイオテクノロジーにとって貴重な資料を提供しつづけている。

7）一時期、アンデス司牧研究所は、社会問題を扱ったスライド（スペイン語とケチュア語の二言語併用）を作製していた。たとえば、「ペルーにおける暴力」「汝は汝の民に何をしたか」「都市と農村の女性――ペルー・アンデス地方――」（『資料ラテンアメリカ』第7号、8号、9号、1985－87年に訳出）などがある。

8）伊豫谷登士翁は、労働力移動と農村社会解体の関係を、「接合」論の観点から意欲的に分析している。彼によれば、農村社会の解体過程は3つの局面、つまり「権力的包摂」・「市場包摂」・「再生産包摂」を経過しなければならず、今日第3世界は、第2局面から第3局面へと急速に移行しつつあり、生存維持部門はまったくの危機にある。そのため、かつてのような「還流型移民」（メイヤスーの用語）が成立する余地はなくなり、むしろ擬似生存維持部門としての都市インフォーマル・セクターを肥大化させる傾向がある。

9）『朝日新聞』1990年8月17日号は、リマ市のストリート・チルドレン問題をレポートし、2年前に始まったCEDRO（薬物使用防止センター）の活動を紹介している。

10）（Barrenechea 1988）が、これまでのところ、このテーマに関する最も網羅的な本であると思う。筆者も、本稿の多くをこれに負っている。

11）たとえば、第12条1項ではこう規定されている。「締約国は、自己の見解をまとめる力のある子供に対して、その子供に影響を与えるすべての事柄について自由に自己の見解を表明する権利を保障する（後略）」（意見表明権）。

12）その割にペルーの比率が低い（表①参照）のは、アラン・ガルシア前政権（1985－90年）が輸出収入の1割しか債務を返済しないという方針を採用したからであろう。この政策についてはスーザン・ジョージも高く評価しているが、日欧米諸国や国際銀行団からは総スカンを食い、準破綻国扱いされたことにより、1988年以降の天文学的数字のインフレを招く原因ともなった。

13）1988年以降のペルーの経済指標は惨憺たるものである。前出の辻氏の報告によれば、国内総生産で見た成長率は、1988年にはマイナス8.8％、1989年にはやはりマイナス12.2％であった。また、物価上昇率は1987年の114.5％から1988年には1722.3％、1989年には2775.3％に急上昇した。1990年もまた物価の高騰はおさまりそうにない。

14）地球的規模での環境危機に対する近年の関心の高まりに加えて、1960年代後半以降、ラテンアメリカで台頭してきた従属論や「解放の神学」運動がこのような意識の変化をもたらしてきたことは否定できないだろう。

【参考文献】

伊豫谷登士翁

1985　「移民の現在――あるペルー女性移民の軌跡を通して――」（東京外国語大学海外事情研究所）

1986　「第3世界における生存維持経済の解体」『南北問題の今日』（本山美彦・田口信夫編著、同文館）

Javier Iguiñiz

1989 "El Sur Andino desde una perspectiva nacional", *Allpanchis*, No. 34.

大田 堯

1990 『国連子どもの権利条約を読む』（岩波ブックレット）

国際人道問題独立委員会

1988 『ストリートチルドレン――都市化が生んだ小さな犠牲者たち』（草土社）

嫁原 一

1988 『嫁原一の〈市民と政治〉5話』（有信堂）

スーザン・ジョージ

1989 『債務危機の真実』（向寿一訳、朝日選書）

チルドレンズ・ライツ刊行委員会（編）

1989 『チルドレンズ・ライツ／いま世界の子どもたちは』（日本評論社）

Carlos Barrenechea Lercari

1988 *Los Niños del Pueblo*, Lima.

Ana Mayer

n.d. *El Mundo de Santiago*, 2 vols., Lima.

松井やより

1990 『市民と援助』（岩波書店）

村井吉敬（編著）

1988 『アジアと私たち――若者のアジア認識――』（三一書房）

ユニセフ 『世界子供白書』

ユニセフ 「ペルーの山の子 オスカー」（開発教育キット シリーズNo.4）

吉田晴彦

1990 「国際開発問題の新次元――『開発教育』運動の構造と動態――」（馬場伸也編『現代国際関係の新次元』日本評論社）